

エペソ人への手紙3章「キリストの奥義との交わり」

1A 示された奥義 1-13

1B 恵みの務め 1-7

1C 使徒たちへの啓示 1-5

2C 共にあずかる福音 6-7

2B 福音宣教 8-13

2A 御力のための祈り 14-21

1B 神とキリストに満たされる祈り 14-19

2B 神への栄光 20-21

本文

パウロによるエペソ人へ手紙 3 章を見ていきます。私たちは前回、キリストが私たちの平和であって、ユダヤ人と異邦人の両者がキリストにあって一つになっていることを 2 章で見ました。そして、異邦人も同じように、神の聖なる国民となり、神の家族の中に入っているということを彼は言いました。けれども、ここまではっきりとした知識は、使徒たちの時代に初めて与えられています。午前礼拝でも話しましたが、使徒ペテロがコリネリウス一家に福音を語った時、彼自身がとてもためりましたし、また、エルサレムのユダヤ人自身者たちは、異邦人の家に行ったということ自体を受け入れがたいものでありました。

けれども、使徒たち自身でさえ、この啓示を受け入れるのに時間がかかりました。パウロ自身も、異邦人に遣わすというイエス様の言葉を聞いて、初めて異邦人にも福音を伝えていました。事実、イエスご自身が、十二弟子にこう言われていました。「**マタ 10:5-6** イエスはこの十二人を遣わす際、彼らにこう命じられた。「異邦人の道に行つてはいけません。また、サマリア人の町に入つてはいけません。6 むしろ、イスラエルの家の失われた羊たちのところに行きなさい。」ここには、神のご計画がありました。まずユダヤ人に福音が届けられます。けれども、ユダヤ人たちがイエス様につまずきました。神は、その、彼らのつまずきをも用いられて、異邦人たちを救われるようにされました。そして、永遠の昔から用意していたご計画を明らかにされたのです。それは、ユダヤ人も異邦人も救われるようにしておられました。けれども、まずイスラエルを選ばれてご自分の民とし、それから異邦人に憐れみを示し、そしてイスラエルにも憐れみを示すというご計画です。

こういったことは、使徒たちが、ユダヤ人たちがメシアを拒んで行ったのを見て、初めて見えてきたご計画です。いや、見えてきたのではなく、神が示されたのです。こうしたこと、つまり神が初めはご自分のしていることを隠しておられたけれども、時が来て明らかにされることを、「奥義」と呼びます。その奥義を、キリストについての奥義をパウロは、解き明かしていきます。それと同時に、

私たち教会として連ねられている者たちが、その奥義の中で生かされていることを見ます。

1A 示された奥義 1-13

1B 恵みの務め 1-7

1C 使徒たちへの啓示 1-5

¹ こういうわけで、あなたがた異邦人のために、私パウロはキリスト・イエスの囚人となっています。

パウロは、今、ローマで囚人になっているところで、この手紙を書いています。使徒の働き最後に、パウロが自費で家を借りて、福音を語っているという言葉がありますが、それは軟禁状態でした。ローマ兵に鎖でつながれているところで、その家に住んでいました。

パウロは、このような境遇になったのは、「あなたがた異邦人のために」と言っています。パウロは、聖霊に示されて、エルサレムに行くことを心に決めました。そして、エルサレムにある教会でヤコブに会い、ユダヤ人たちのしきたりによって、清めの儀式を行ない、神殿で礼拝をささげおうとしておりました。すると、アジア地方から来ていたユダヤ人たちが、パウロがエペソ人を神殿の中に入れていって叫びました。そこで町中が殺到して、人々はパウロを捕らえ、宮の外にひきずり出そうとしました。これをローマの千人隊長が見て、パウロを彼らの手から奪い取り、パウロを兵営に連れて行こうとしました。けれども、パウロは仲間のユダヤ人たちに話をしたいと千人隊長に申し出て、彼はヘブル語でユダヤ人たちに、自分の回心について話しました。

パウロは、ダマスコに行く途上で主イエスに出会ったことについて話しましたが、ずっと、彼らは聞き入っていたのですが、そして、主が自分に、「行きなさい。わたしはあなたを遠く異邦人に遣わす(使徒 22:21)」と言われたことを話しました。ところが、パウロが、この「異邦人」という言葉を発したとたん、聴衆が声を張り上げ、わめき立てるので、千人隊長はパウロを拘禁しました。これが、パウロが囚人となった始まりなのです。この後は、数年、カイサリアにパウロはいましたが、ローマ総督たちの政治の道具に利用されているのを知って、カイサルに上訴しました。それで今、ローマにいて囚人となっているのです。ですから、パウロが囚人となったのは、紛れもなく、自分が異邦人に福音を宣べ伝えていること、このことに他ならなかったのです。

自分のことを、「キリスト・イエスの囚人」と言っているところがすばらしいです。ローマの囚人になっているのです。けれども、彼は、これが主にお仕えしているからそうなっているのだということをよく知っていました。それで、キリスト・イエスご自身の囚人なのだと言っています。主のみこころによって、私たちもこの告白ができるといいですね。自分が仕事をしていても、上司に仕えているのではなく、主がそこに自分を導かれているのですから、主イエスにお仕えしているのです。

² あなたがたのために私に与えられた神の恵みの務めについては、あなたがたはすでに聞いたこ

とでしょう。

異邦人に福音を伝えることを、「神の恵みの務め」と言っています。この「務め」は、ギリシア語ではオイコノミア(oikonomia)と言います。オイコスが家という意味です。神の家を管理するような意味合いがあります。つまり、神の恵みについて、その全貌を管理するような意味合いになっています。どのように恵みによって生きるのかの管理が任されているということです。管理については、イエスが弟子たちに教えておられました。「マタ 13:52 こういうわけで、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物と古い物を取り出す、一家の主人のようです。」そしてパウロは、「Iコリ 4:1 人は私たちをキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです。」と言いました。

どのような恵みの管理なのでしょう？それは、イエスが、王子の婚宴の喩えで語られたものでしょう。そこで王子の結婚の披露宴に招待していた人々が、次々と言い訳をいってきませんでした。それで王がしもべたちに、言いました。「マタ 22:8-10 披露宴の用意はできているが、招待した人たちはふさわしくなかった。だから大通りに行って、出会った人をみな披露宴に招きなさい。』しもべたちは通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った人をみな集めたので、披露宴は客でいっぱいになった。」招かれていなかった者たちを、王は招きました。通りにいた人々です。招待されていたのがユダヤ人で、そして通りにいたのが異邦人です。私たち異邦人は、神が、用意されていた披露宴の席を埋めるために呼ばれたものなのです。神は、何とかしてご自分の王子であるイエスのために、その食事の席に招きたいと願われて、それで私たちを招いてくださいました。

私たちは思いますね？「なんで、こんな自分が招かれたのだろう？」はい、それは自分に何か魅力的なもの、好かれるところがあったのではないのです。ただ、神が気前の良いお方で、私たちに王子の披露宴の席についてほしいと願われたのです。だから、教会にはいろいろな人たちがいます！一定の条件を満たした人たちが集まっているのではないのです！ただ、神の気前良さに、応答した人々が集まっているのです。

³先に短く書いたとおり、奥義が啓示によって私に知らされました。

啓示によって奥義が知らされました。ここが大事です、自分で理解しよう、把握しようとしても、ただ難しくなっていくだけです。むしろ、自分自身が知りようもない時に、主が一方的に示してくださる知識であります。午前礼拝でお話したように、不条理なことが起こった時、苦しんでいる時など、目で見えるものでは、到底、理解できないにも関わらず、これこそが主の愛であると分かってしまうところの啓示です。主が、敢えて私たちに理由を示さないことを、聖書では「隠している」と言っています。「イザ 45:15 イスラエルの神、救い主よ。まことに、あなたはご自分を隠す神。」主は、私たちに、子が父を信頼するように、信頼することを願っておられます。その信頼の中で、神を知るようになってほしいと願われています。父と子にあるような交わりが目的であって、その知識や知恵

を全て得て、納得し、把握することが目的ではないからです。

⁴ それを読めば、私がキリストの奥義をどう理解しているかがよく分かるはずです。

これは、1 章にあった奥義の説明のことだと思います。「1:9-10 みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。その奥義とは、キリストにあって神があらかじめお立てになったみむねにしたがい、10 時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。」キリストにあって、すべてのものが一つに集められるということ。キリストにあって一つになるということです。アダムが罪を犯すことによって、神と人がばらばらになってしまいました。それだけでなく、バベルの塔によって人々の言葉がばかばらになり、人々が別れていってしまいました。そして今、福音の真理を拒んでいるので、一人ひとりが自分の信じるところに従っているのが、孤立しています。そこに、キリストにあって一つに集められるということは、福音です。人々だけでなく、被造物は、神によって調和を取り戻すことを願って、うめいていることがロマ 8 章に書かれています。その一環として、当時、深刻な隔たりがあった、異邦人とユダヤ人の壁を、主が取り壊してくださいました。

⁵ この奥義は、前の時代には、今のように人の子らに知らされていませんでしたが、今は御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されています。

前の時代には、わずかに示されていましたが、おぼろげであります。イエスが来られた時でさえ、先ほど主の弟子たちに言われた言葉を見ればわかりますように、まずイスラエルが救われるための福音を語られました。しかし、今は御霊によって、使徒たちに示されているのです。

イエス様は、天の御国の奥義の喩えを語られた時に、弟子たちに言われました。「マタ 13:16-17 しかし、あなたがたの目は見えているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。17 まことに、あなたがたに言います。多くの預言者や義人たちが、あなたがたが見ているものを見たいと切に願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと切に願ったのに、聞けませんでした。」神の本質の完全な現われであるキリストが来られました。この方を見ているので、弟子たちは幸いなのです。かつての預言者や義人たちには、示されていてもそれがどういうことなのかを示されていなかったのです。ダニエルも、いろいろ示されましたが、その意味が分からないで御使いに尋ねると、「12:9 このことばは終わりの時まで秘められ、封じられているからだ。」と言いました。しかし、イエス・キリストが来られたので、今は、すべて開かれています。それが黙示録で、子羊が封印を一つ一つ解いていき、最後は開かれた書物が、10 章に現れます。

2C 共にあずかる福音 6-7

⁶ それは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだ

に連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。

これは、ユダヤ人たちにとって、また当時の異邦人たちにとっても、衝撃的な啓示であります。ユダヤ人こそが神に選ばれて、神のものの相続人として定められていました。そして、その神の共同体、からだにはユダヤ人たちが集まっているところであり、異邦人は、救われていない人々、神を知らない人々ということでした。だから、異邦人が救われるためには、ユダヤ人になる、ユダヤ教に改宗するということとなります。けれども、福音によって、またキリスト・イエスにあって、異邦人は異邦人のままで、神の御国の中に入り、その約束にあずかるということは、驚くべきことでした。そして、これはイザヤ書など、島々に至るまで、つまり世界のいたるところに至るまで神の救いが訪れるという、壮大な幻の中に暗示はされていましたが、共にあずかるということまでは、はっきりと示されていませんでした。

けれども、キリストにあって一つに集められるというのが、神の永遠の昔からのみこころであり、ご自身が一つであられるように、交わりに入る者たちも一つになることを願っておられたのです。それは、ご自分のかたちに造られた人から女がわざわざ造られて、男と女が一つになるようにされたところで、すでに現れていました。その一体になるというヘブル語は、神がひとりであるというヘブル語と同じ言葉が使われています。人々が、このようにキリストにあって結ばれて一つにされ、被造物もその調和の中に加わることを神は願われておられるのです。

ところで、前回も話しましたが、その区別をなくすということではないことです。「共同の相続人」「ともに連なる」「あずかる」と言う言葉にあるように、イスラエルに対する相続、からだ、約束が無効にされたわけではありません。むしろ異邦人が、キリストにあって、そこに加わるようにされているということです。異邦人が来たのだから、イスラエルは見捨てられるという見方も間違いであり、イスラエルは死からよみがえるような回復があることを、パウロはロマ 11 章で教えています。そうした多様性、違いも、キリストにあっては、互いに敵対するものではなく、むしろ神の栄光を現わすものとして変えられます。

⁷ 私は、神の力の働きによって私に与えられた神の恵みの賜物により、この福音に仕える者になりました。

パウロは、この福音に仕える者になりました。しかし、それは二つのことによって成り立っています。一つは、「神の力の働きによって」であります。彼の素質や能力ではなく、神の御霊と力によって、パウロは福音に仕えていました。みなさんも、信じる者には御霊が与えられています。聖霊の力と賜物を求めましょう。そして、もう一つは、「神の恵みの賜物」だということです。自分には、全くその奉仕にあずかる資格はないのです。神が一方的に、恵みによって彼を選ばれたのです。ですから、私たちが、何かの奉仕に携わる時に、それがふさわしくないとか、あるいは逆に、その奉仕

に拘るとか、固執するとか、どちらも自分自身から来ているものと思っているから、間違いです。神の恵みによって、賜物が与えられ、恵みによって立っているのです。

2B 福音宣教 8-13

⁸ すべての聖徒たちのうちで最も小さな私に、この恵みが与えられたのは、キリストの測り知れない富を福音として異邦人に宣べ伝えるためであり、

パウロには、圧倒的に自分が最も小さいという思いがありました。コリント第一 15 章には、「使徒の中で最も小さい(9 節)」と言い、ここでは、「すべての聖徒たちのうちで最も小さな」と言って、テモテに対しては第一の手紙で、「罪人のかしら」とまで言っています(1:15)。彼は、自分が滅ぼされて当然であるという思い、絶望感がありました。しかし、その私に、神がとてつもない恵みを注いでくださった、ということです。私は、自分に対してはしばしば、「こんな、どうしようもない自分」と独り言のようにして心の中で言っています。しかし、とてつもない好意を、神は向けていてくださっている。これが、驚きの恵みなのです。

そして、そこには目的があって、「キリストの測り知れない富」を宣べ伝えるためだ、とのことです。これから読み進めますと、もう言葉では収めきれない表現が続きます。私たちの思いや理解では収まらない、キリストにある神の富です。自分が四方 50 畝のプールのような恵みの中で泳いでいると思いきや、実は、太平洋のような広さの水のような恵みであった、というような感覚でしょうか。測り知れない富であります。そして、それが福音の中にあり、パウロはそれを異邦人に宣べ伝えていました。

⁹ また、万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義の実現がどのようなものなのかを、すべての人に明らかにするためです。

先に申し上げた通り、神はイスラエルを選び、それを救うご計画を持っていましたが、天地創造の始めから、すべての人を救うことのできる恵みをお考えになっていました。それを世々に隠しておられたのですが、キリストが現れた今、使徒たちにそのことを御霊によって示されたのです。

ここに、「奥義の実現」とあります。この「実現」であります。ギリシア語ではコイノニアという、交わりを表す言葉です。ですから、「奥義の交わり」と訳すことができます。神の奥義は、私たちの人知をはるかに超えたものです。ですから、私たちがこれを小さな頭で理解することではなく、神ご自身が啓示されて、知っていくものであります。その知識は私たちの知性や理性によるものではなく、霊によって知るものです。先ほど話しましたように、父なる神に子が信頼している時の知識、交わっている時の知識です。お父さんが子を愛し、子がお父さんを知っているという時の知識です。

¹⁰ これは、今、天上にある支配と権威に、教会を通して神のきわめて豊かな知恵が知らされるためであり、

天上にある支配と権威、というのは、霊的な存在、天使たちのことです。墮落した天使もいれば、主に仕える天使もいます。教会が、そのような支配や権威に対して、神のきわめて豊かな知恵が知らされて行っています。これはすごいことです。天にいる霊的な権威が、教会を見ると、なんと神は知恵のある方なのかと驚きをもって眺めている、ということです。

¹¹ 私たちの主キリスト・イエスにおいて成し遂げられた、永遠のご計画によるものです。

エペソ 1 章で見たように、世界の基が置かれる前から、キリストにあって私たちを選んでくださっていますから、そういった永遠の計画によって、少しずつ知恵を明らかにしておられて、教会によってそれを明らかにして、御使いたちも驚いているということです。

教会がこれほどの、神のきわめて豊かな知恵が隠されているところということ、私たち自身が気づくといいですね。私たちは、神のきわめて豊かな知恵が、恵みとして流れている教会という当事者なんですね。ぜひ、これを知りたいですね。

例えば、人体は不思議な存在です。私は、先週月曜日に、親知らずの移植治療を受けました。もうだめになってしまった奥歯を抜いた後に、親知らずを抜いて、それを抜いた奥歯のところに移植するのです。でも、ただそこに入れるだけで、なぜ根付くのか？ 抜歯すると、歯には歯根膜というのがあります。その歯根膜が、移植という刺激を受けると、再生能力を持つ細胞を活性化させるのだそうです！ただ、移しただけで、その膜が一生懸命活動してくれて、歯として根付くようになるのです。これを思うと、とても不思議ですよ。私たちは、同じように、キリストの測り知れない富が、神のきわめて富んだ知恵の中で、恵みとして流れている、からだなんですね。私たちを見ていると、天使たちは驚いて見ているのです。なんとすぐれた知恵なのだろうか！と。

私の友人で、目がだんだん見えなくなる難病にかかっているキリスト者がいます。さらに、自分の経営している会社が潰れてしまうのではないか？と思われる状況にあります。その彼がこう言っていました。「自分の中にある限られた知識を総動員し、理屈で聖書を理解しようとすると、キリスト教が難しくなる。自分の知識に頼らず、海よりも広い神の愛に自分が包まれ、どんなに辛いことと苦しいことがあっても、すべてのことに神からの啓示が隠されており、自分の意識しないところで「神が自分を導いてくれていることを信じる」ことが、信仰の本質であることに気づいた時、聖書のみことばが理屈ではなく、飢え渴いた魂に無尽蔵に湧き出してくる恵みの水によって満たされる感覚を覚える。」¹このような苦難の中にいるのに、海よりも広い神の愛に自分が包まれていると言っ

¹ <https://www.facebook.com/nishiharat/posts/pfbid02uPgfJTm92Z3sC4ipDwYUuDKpfJf39uxQewiAc8mkejwkGLMSeAF2U2JGh1Utc3B6l>

ています。そんな苦難の中にいるのに、神が導いておられることを知って、無尽蔵に湧き出してくる恵みの水に満たされているというのです！これが、神の隠れた啓示である、つまり奥義であると言っているのです。理屈ではありません。自分自身から出たものではありません。こんな証しをすることができる教会を見て、御使いたちは、とてつもない神の知恵に圧倒されているのです。

¹² 私たちはこのキリストにあつて、キリストに対する信仰により、確信をもって大胆に神に近づくことができます。

私たちがこれほどまでに、愛されているのですから、当然ながら、神は私たちが近づくのを喜んでおられます。確信をもって大胆に近づくことができます。この大胆に、というのは、恐れなくということです。こんなこと言っても、誰かに嫌な思いをさせてしまうのではないか？という恐れが、私たちはいつもありますね。そういった恐れを持たなくてよいのです。主は、どんなことで聞いてくださいます。もし過ちがあるならば、聖霊が優しく諭し、導いてくださいます。試練を受けたヨブが、あれほど大胆に神に訴えて、主は叱責されましたが、初めの時に比べて二倍に回復させてくださいました。そして、ヘブル書 4 章 16 節には、神の御座が恵みの御座であることを教えています。もはや、裁きの御座ではなく、恵みの御座なのです。

¹³ ですから、私があなたがたのために苦難にあつていることで、落胆することのないようお願いします。私が受けている苦難は、あなたがたの栄光なのです。

エペソの人たちが、自分がローマで幽閉されているからと言って、落胆しないでほしいと言っています。これまで話したように、異邦人のために、福音によって囚人となっているのですから、このことは自分にとって光栄であるし、異邦人の人たちにとっては、栄光なのだと言っています。これは、ちょうどキリストが十字架に付けられて、その苦難をキリストの栄光と言っているのと同じです。キリストがむごい死に方をされていて、どうして栄光なのでしょう？そこには、神が全ての人を救う、永遠の知恵が隠されているからです。すべての人のために死に、罪を赦し、和解させる知恵があるからです。神の永遠の愛がそこに隠されているからです。だから、栄光なのです。それと同じです。パウロが受けているのは、キリストの苦しみであり、異邦人のために受けている苦しみであり、異邦人にとっては、そこに神のきわめて豊かな知恵があり、ゆえに栄光なのです。

2A 御力のための祈り 14-21

そこで、パウロは祈りはじめます。先に、1 章 15 節以降で、彼が神に感謝しながら祈ったのに引き続いて、パウロは、神への深い畏敬の思いを抱きながら祈りの姿勢を取ります。

1B 神とキリストに満たされる祈り 14-19

¹⁴ こういうわけで、私は膝をかがめて、¹⁵ 天と地にあるすべての家族の、「家族」という呼び名の元

である御父の前に祈ります。

祈る時に、膝をかがめています。聖書には、膝をかがめる祈りが多く出てきます。主なる神の前ですから、王の前に願い出ると同じように、膝をかがめるのです。ソロモンが神殿奉献の時の祈りで祈りました(1列王 8:54)。イエス様は、ゲッセマネの園でひざまずいて祈られました(ルカ 22:41)。パウロは、エルサレムに向かっていて、そこで苦難があることを分かりながら向かっていましたが、ツロの港を出る時に、弟子たちと共につまずいて祈って、それから別れを告げています(使徒 21:5)。

そして、パウロは、御父の前で祈りますが、大胆にも、「天と地にあるすべての家族の、「家族」という呼び名の元である御父」であります。神は、父なる神と呼ばれていますが、このように家族の元になっておられる方なのです。いかに、家族がご自身にとって大切な存在であるかは、ご自身と御子との関係があるところから明らかです。地上の家族について、十戒では、父と母を敬えというところがあり、イスラエルも教会も、神の家族と呼ばれているのです。そこにある結びつきが、いかに大切かということです。キリストにあってすべてを一つに集める、というのには、このような結びつき、家族としての結びつきがあります。

¹⁶ どうか御父が、その栄光の豊かさにしたがって、内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めてくださいますように。

これが、一つ目の祈りです。御父が、私たちが強めてくださるよということ。先ほど、落胆しないでくださいとパウロがお願いしていましたが、強められますように、と祈っています。どのように強められるのか？「栄光の豊かさにしたがって」であります。神の栄光を仰ぎ見る時、私たちは強められます。「ロマ 5:2 このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」

そして、私たちが強められるのは、「内なる人」です。これは私たちが、御霊によって新しくされた人であり、御霊によって、力をもって強められます。他の箇所、「Ⅱコリ 4:16 ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。」とあります。ですから、パウロが今、鎖につながれているような状況があっても、外なる人は衰えていっても、内なる人は御霊によって強められることができます。

^{17a} 信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。

二つ目の祈りは、キリストが心のうちに住まわせてくださるよ、というものです。これまで、キリストにあって、神の全ての霊的祝福を受けることが語られてきました。肝心のキリストご自身が、

心の中で親しく私たちと交わらせてくださいますように、と祈っています。

^{17b} そして、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、¹⁸ すべての聖徒たちとともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、^{19a} 人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。

三つ目の祈りは、キリストの愛を知ることができるように、ということです。

まず、その愛を知るにあたって、「愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがた」とあります。「根ざす」というのは、根を張ること、つまり菜園の意味合いです。キリストの愛に養われているかどうか、ということでもあります。ゆっくりと主にあって休み、その愛に育まれる、幼子のような態度です。そして「基礎を置く」というのは、建築に使われる言葉です。つまり、愛によって生活の安定が与えられているかどうか、であります。自分が何かをしたから神に愛され、受け入れられるのではありません。神は愛ですから、愛ではないことを神は行うことができません。実に神は、私たちが罪人であった時にご自分の子を死に渡されて、愛を示されました。そして、愛の基礎工事が行われていれば、ちょうどイエス様が洪水の時の二つの家の例えにあるように、試練の時にも耐えることのできる、神との愛の関係を持っていることができます。

そして、「すべての聖徒たちとともに」と言っていますね。私たちはこの教会の人たちがいます。また、世界中の教会の人たちがいます。また歴史において、過去の教会の人たち、天にある教会の人たちがいます。このような大家族が、聖なる神に別たれているのだということです。先ほどの祈り、内なる人が強められるということと、同じ神の家族として愛し合うというのは一対になっています。強い人が、弱い人の弱さを担います(ロマ 15:1 参照)。

そしてキリストの愛には、「広さ、長さ、高さ、深さ」があります。広さは、神が実に独り子をお与えになったほどに、世界を愛されたとあるように、全世界の人々にキリストの愛は広まっています。このことを理解できますように。次に、長さですが、神の愛は永遠の愛です。ですから、十字架の上で御子を通して成されたことは、二千年前のパウロであっても、現在の私たちであっても同じなのです。ルターは、「キリストが死なれたのは、つい昨日のこのように感じる。」というようなことを話しました。次に、「高さ」があります。キリストが死なれたことによって、神は、その流された血を受け入れられました。キリストの血が、神の聖所をきよめられました。ですから、私たちが天のところに座ることができるようになりました。そして、「深さ」です。これは、どんなに罪を犯しても、キリストはさらにご自身を低くされ、その深みにまで来てくださいます。ゲッセマネの園での祈り、そして十字架に至るまでの道に、愛の深さがあります。そして主は葬られてから、陰府に降られましたから、本当に深いのです。

そして午前中のお話ししましたように、「人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができま
すように」ということなのです。もうこの言葉が矛盾しているのではないことを、ご理解したのではな
いでしょうか？人知とは、私たちの理解力のことです。それははるかに超えています。けれども、
キリストの愛は霊で知ることができます。神の奥義が、啓示によって与えられます。主が、教えてく
ださるのです、示してくださるのです。そこには知恵が満ちあふれており、囚人になっ
ても、それでも栄光ということのできる勇気を与えます。

^{19b} そのようにして、神の満ちあふれる豊かさにまで、あなたがたが満たされますように。

これが、四つ目、最後の祈りです。キリストの愛を知ることにより、神の豊かさが私たちの中から
満ち溢れます。私たちに、貧乏根性があれば、それも神の満ちあふれる豊かさによって、押し流さ
れるように祈りましょう。貧乏根性とは、自分で何とかしないとイケないと思っ
て、自分の理解で、自分の力で生きようとする事です。肉の力です。そういったものを、膨大な、恵みという、高圧洗
浄で洗い清めていただきます。

2B 神への栄光 20-21

²⁰ どうか、私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超
えて行くことのできる方に、

先ほど、御父の栄光の豊かさによって、内なる人の御力が働いて、強められるとありました。そ
の御力によって、私たちの願うところ、思うところをはるかに超えて、神が行ってくださいます。午前
礼拝でお話した通りですが、これはもう、私たちは当事者なのです。渦中にいるのです。主が、
願われるままに行ってくださいとしか、いえないのです。

²¹ 教会において、またキリスト・イエスにあって、栄光が、世々限りなく、とこしえまでもありますよう
に。アーメン。

栄光があるように、という頌栄です。初めに、教会において、とあります。個人主義の発達した時
代は、反キリストの霊も働きやすい時代です。つまり、自分の知識によって、教会から離れて、神
とつながることができると思っています。ヨハネ第一には、そうやって教会から離れていく者たちの
姿が出て来て、彼らは反キリストたちであるとヨハネは言っています。教会によって救われるの
ではなく、キリストによって救われるのですが、教会という現場で救われるのです。物理的に寝たきり
で、外に出られない、囚人になっている人が信仰を持つとかありますが、必ずそこにも、不思議な
教会という存在が生まれてきます。

そしてキリスト・イエスにある栄光です。この方にあって神の栄光があります。そして、その栄光

が世々に限りなくあるのです。私たちは、この永遠性に生きていますね。測り知れない、無尽蔵のキリストの富ですから、永遠にまで明らかにされていく神の恵みなのです。